

50 周年特別寄稿 霧ヶ峰のトウヒレン

門田 裕一*

はじめに

日本列島の植物相に関しては、世界的にもレベルの高い植物図鑑や、様々な地域を対象とした植物誌が出版されていて、既に調べつくされたようにみなされているのが普通である。しかしながら、毎年のように新植物が発表されている現状を踏まえると、さらなる調査・研究を要する地域は日本列島のあちこちに残されていると考えるのが自然だろう。とりわけ、長野県は全県的に奥深い山岳地帯が広がって

いるため、今だに調査が行き届いていない地域が広く残されている。そのような地域には今もなお未知の植物が息づいている可能性が高い。筆者が現在取り組んでいる、キク科のアザミ属やコウモリソウ属をその例として挙げることができる。ここでは、県中部の霧ヶ峰を取り上げて、キク科のトウヒレン属のいくつかの種についての知見をご紹介したいと思う。霧ヶ峰を取り上げる理由は、この地が全国的に有名な観光地で比較的アプローチが容易であること、また一方では、山域として小さくまとまって

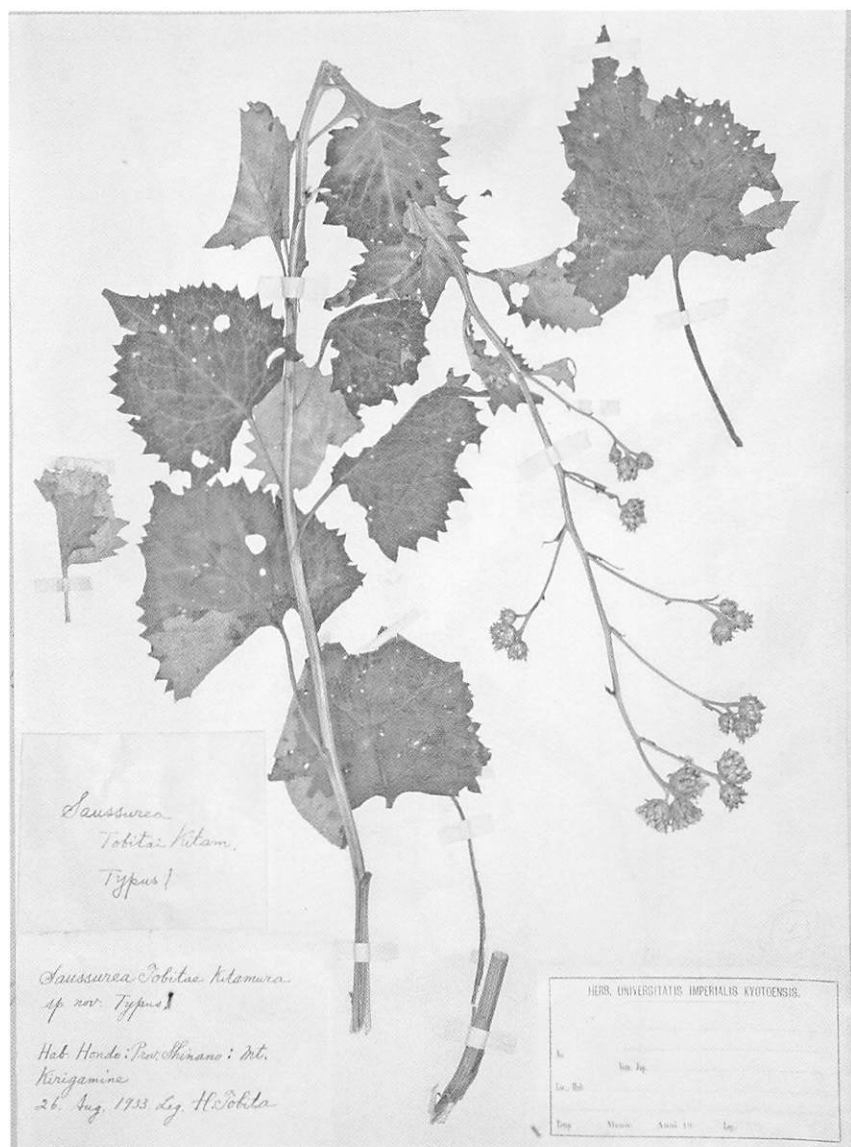


図1. シナノトウヒレンのタイプ標本（霧ヶ峰産、飛田廣氏採集、京都大学総合博物館）

* 国立科学博物館名誉研究員

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

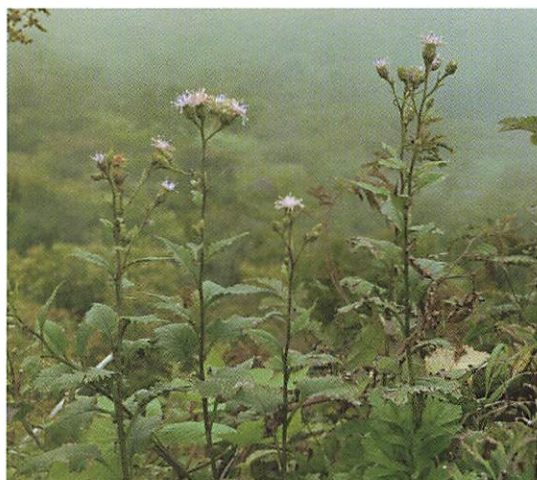


図2. シナノトウヒレン。車山頂上付近
(川上美保子氏提供)。



図3. シナノトウヒレンの
総苞。車山頂上付近。



図5. キリガミネトウヒレンの
総苞。池のくるみ湿原。



図4. キリガミネトウヒレンのタイプ標本（霧ヶ峰産、飛田廣氏採集、京都大学総合博物館）。

いるために実地での検証をしやすいたことが理由である。

トウヒレン属

トウヒレン属はキク科キク亜科アザミ連に属し、日本産植物には50以上の分類群が認められている。本属はアザミ属に似るが、一般的には植物体にトゲのないこと、植物学的には花柱分枝が明瞭に開くことが最も分かりやすい形態的な違いであろう。アザミ属とは異なり、この属全体として遺存的な傾向があり、とくに西日本ではその性格が強い。この属の植物には高山性と山地性の二群があり、高山性の種群では山系ごとに種が置き換わることが興味深い。属を通じて、染色体数は全て $2n=2x=26$ で、ごくわずかな例外を除き変異は知られていない。

日本産トウヒレン属は「分類が難しい」といわれる。しかし、系統的に近縁なアザミ属の分類が難しいのとは異なり、トウヒレン属の分類が難しいのは分類体系自体が確立されていないことに起因する、と私は考えている。次に述べるシナノトウヒレンとキリガミネトウヒレンについては既に長野県植物研究会2013年度大会の講演で紹介しているので、ここでは簡単に触れることにしたい。

1. シナノトウヒレン

美ヶ原～霧ヶ峰の山系の上部高山帯にはシナノトウヒレン *Saussurea tobitae* Kitam. が分布する（基準産地は霧ヶ峰：図1、2）。本種は高山性の種群（シラネアザミ群）の1種で、この群としては頭花が小型で、総苞片は6列（図3）、茎葉が心形～三角形心形となるのが特徴である。

長野県内のシラネアザミ群には、北アルプス・妙高山系にクロトウヒレン（木曽御岳・中央アルプスのものは別物か？一目下検討中の課題）、八ヶ岳・南アルプス・富士山にシラネヒゴタイ（タカネヒゴタイ）、籠ノ登山～高峰山～浅間山にトウミトウヒレン（新称）などがある。この群の名前の元となったシラネアザミは日光、尾瀬、磐梯山、吾妻山に分布し、長野県では知られていない。高山性で狭筒形の総苞をもつものには、ヤハズトウヒレン（北アルプス）、ヤハズヒゴタイ（八ヶ岳・南アルプス・富士山）、キンブヒゴタイ（奥秩父）などがある。南アルプス・豊口山には未知のトウヒレン属があるらしい（検討中）。トウヒレン属はヒマラヤ地域に多くの種がある。しかし、長野県のような比較的狭い

地域にこれだけの種があるという状況はヒマラヤ地域には見られない。

2. キリガミネトウヒレン

キリガミネトウヒレンは山地性種群の一つで、霧ヶ峰とその周辺の湿地に生える。湿地といっても水中に生える訳ではなく、湿地周辺や小さな水流の辺りの水湿地に生育する。本種は中国地方に分布するネコヤマヒゴタイと同一種とみなされ、最近ではその異名（シノニム）と扱われるのが普通である。しかし、ネコヤマヒゴタイは超塩基性岩地など乾性の草原に生える植物で、形態的にもキリガミネトウヒレンとは区別できる。結論的には、キリガミネトウヒレンは、ネコヤマヒゴタイとは異なる、独立種 *Saussurea kirigaminensis* Kitam. と扱うのが適当である（図4）。本種は頭花が散房状につき、総苞は狭筒形で、総苞片は8列、総苞外片の上半部は尾状に長く伸長し、茎に翼があり、茎葉の葉柄基部が抱茎するという特徴がある（図5）。本種は長野県に分布するが、栃木県那須や福島県白河産の植物がキリガミネトウヒレンに当たるかどうかは今後の問題である。

3. 「スワトウヒレン」

霧ヶ峰にはこの他に、セイタカトウヒレン、ヒメヒゴタイ、ミヤコアザミ、キクアザミなどのトウヒレン属植物が知られており、全国的に見てもトウヒレン属の種類が多い、稀有な地域である。これだけ複数の種があるのに自然雑種は今のところ知られていない。ここでは雑種の話は脇に置き、霧ヶ峰に分布するらしい、もう一つの未知のトウヒレンについて述べたい。

牧野富太郎博士が所蔵していたトウヒレン属の標本を整理しているうちに図6のようなものが見つかった。これは全体の雰囲気はキリガミネトウヒレンによく似ている。それは茎葉の形による。しかし、葉柄には明瞭な翼があり、翼はそのまま茎に流れる。総苞は少し太く、キリガミネトウヒレンの狭筒形よりも筒形というのが相応しい。この個体は完全に開花したものでないため、総苞片の列数は数えにくいですが、8列以上が認められる。総苞外片は卵形で、先端は短く尖る（図7）。霧ヶ峰の稜線部に出現するシナノトウヒレンは総苞片が6列で、先端は尾状に長く尖るのでこれとは異なる。

牧野博士の標本を見て思い出したのは小泉秀雄氏の標本（霧ヶ峰頂付近、1931年9月13日、小泉

秀雄 44514、TNS 1789650) である。これは牧野博士の標本と同じ分類群に所属すると考えられる。小泉氏の手記には「霧ヶ峰頂付近」とあるので、生育地は霧ヶ峰の稜線部で、ここに分布するシナノトウヒレンとは微妙に棲み分けているのかもしれない。「スワトウヒレン」は小泉氏の命名のようだが、この名前は記載を伴っていないので、裸名ということになる。小泉氏は和名の由来に言及していないが、これは疑いなく「諏訪塔飛簾」であろう。

スワトウヒレンは霧ヶ峰のどこにあるのだろうか？あるいは絶滅してしまったのだろうか？トウヒレン属には一見似たものが多いので、今もなお、知られることもなく霧ヶ峰の稜線部にひっそりと生きているのかもしれない。

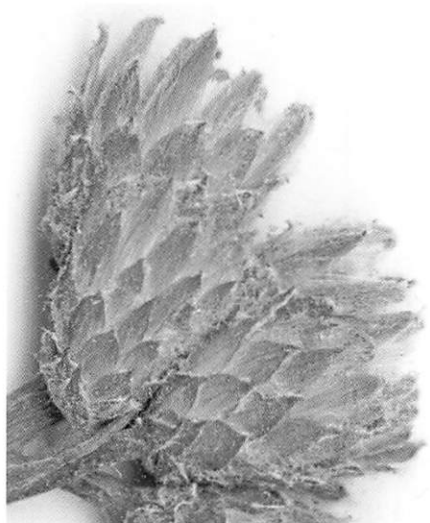


図7.「スワトウヒレン」の頭花（牧野富太郎博士採集、国立科学博物館）。

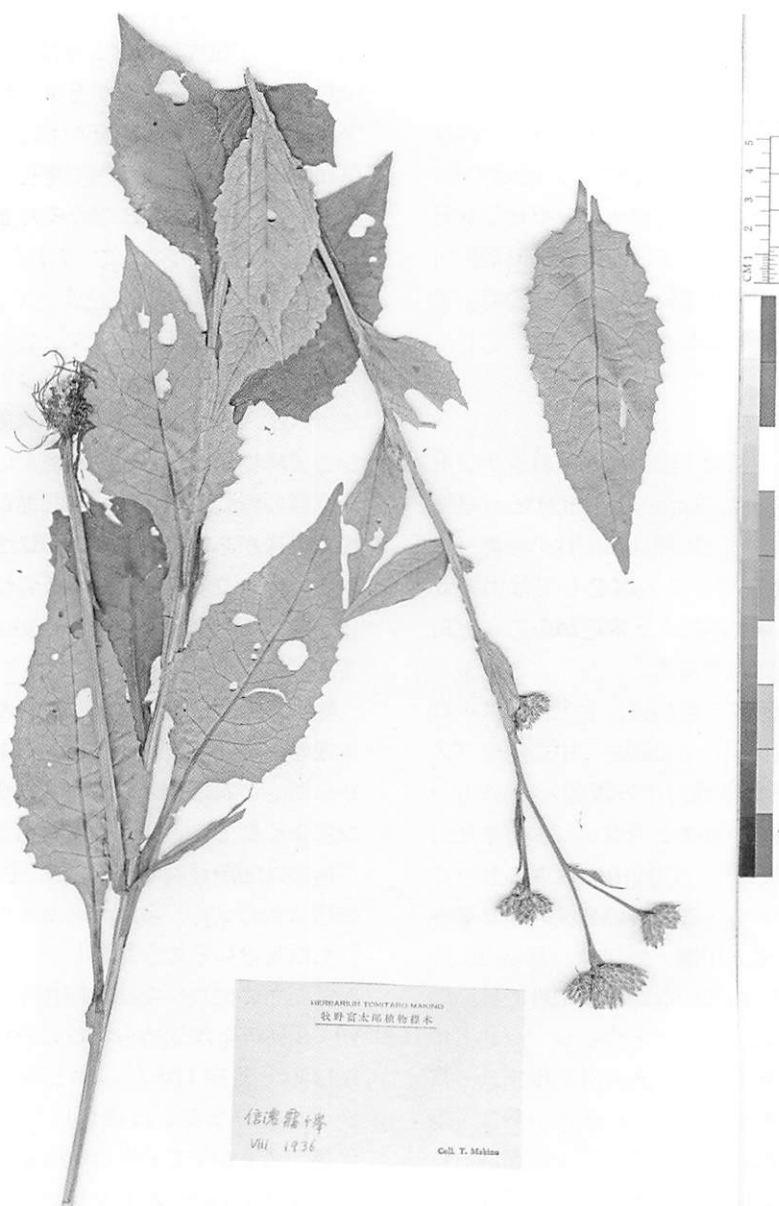


図6.「スワトウヒレン」（牧野富太郎博士採集、国立科学博物館）。